

上唇腺に発生した唾石症の1例

太田 貴久 住友伸一郎 馬嶋 隆
高井 良招

Sialolithiasis of the Minor Salivary Gland of the Upper Lip

OHTA TAKAHISA, SUMITOMO SHINICHIRO, MAJIMA TAKASHI and TAKAI YOSHIAKI

唾石症は口腔外科臨床において比較的高頻度に遭遇する疾患であるが、その80%以上は頸下腺に発生し、小唾液腺では比較的希な疾患と考えられている。

69歳の女性。左側口唇の直径5mmで可動性の硬い腫瘍を主訴に来院した。エックス線検査で、腫瘍内部に不透過像の存在は認めなかった。唾液腺腫瘍の臨床診断で局所麻酔下に腫瘍を切除した。摘出物剖面に直径1mmの石灰化物を確認し、病理組織学的検査で唾液腺炎の像を認めたために、最終的に小唾液腺唾石症と診断した。

キーワード：唾石症、小唾液腺、症例報告

Sialolithiasis is a common disease in oral surgery. More than 80% of sialolithiasis occurs in the submandibular gland, in the minor salivary gland, sialolithiasis seems to be relatively rare.

A 69-year-old woman complained of a mass in the left upper lip. The mass was 5 mm in diameter, movable and hard. No radiopaque lesion was observed in the tumor mass. Minor salivary gland tumor was suspected clinically and resection was done under local anesthesia. A small calculus, 1 mm in diameter, was observed in a section of the tumor mass, and histopathological findings showed sialoadenitis. The final diagnosis was sialolithiasis of the minor salivary gland.

Key words : Sialolithiasis, Minor salivary gland, Case report

緒言

唾石症は歯科臨床においてしばしば遭遇する疾患であるが、そのほとんどが頸下腺に発症し、小唾液腺には比較的希であるといわれている。今回われわれは、69歳の女性の上唇に発生した小唾液腺唾石症を経験し、その概要に文献的考察を加えて報告する。

症例

69歳の女性。平成12年10月26日に左側上唇の腫瘍を主訴として来院した。昨日、腫瘍の存在に気付いたと

のこと、それ以前から存在していたかどうかはまったくわからないという。腫瘍は直径5mmで硬く、軽度の圧痛を呈し、可動性があり被覆粘膜は正常であった(Fig. 1)。既往歴として17年前に乳癌の手術を受けたとのことであった。

同部のエックス線検査を行なったが、不透過物の存在は認められなかった。

唾液腺腫瘍を疑い、同日、全摘出を行った。摘出物の剖面を観察したところ直径1mmの帶黃白色を呈する石灰化物を認め(Fig. 2)，病理組織検査により膿瘍を伴う小唾液腺炎の所見が認められたために(Fig. 3, 4)，最終的に上唇腺唾石症と診断した。唾石の存在した腔は多列円柱上皮で裏装されており(Fig. 3, 4)，唾石は導管内に存在したことが確認された。

朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野

501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Division of Oral

Pathogenesis and Disease Control

Asahi University School of Dentistry

Hozumi 1851, Mizuho, Gifu 501-0296, Japan

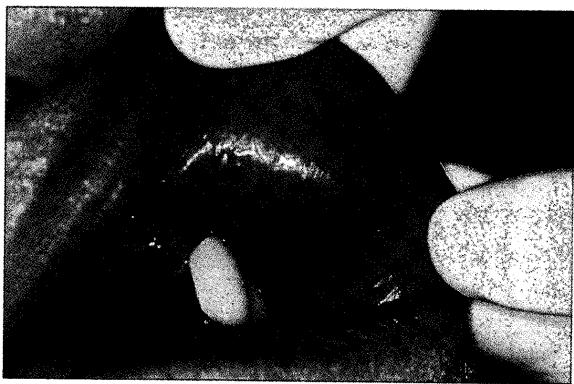


Fig 1. First inspection of left upper lip

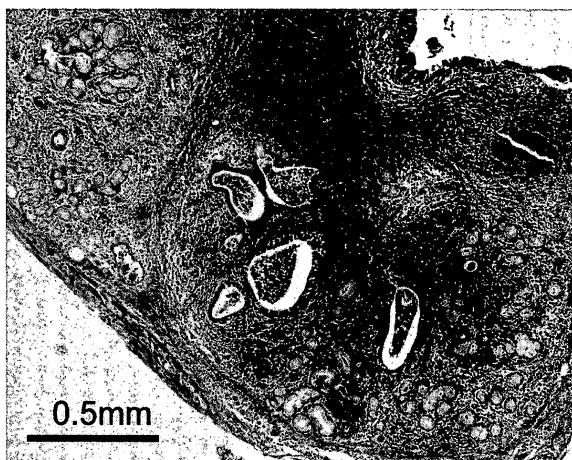


Fig 3. HE staining, low magnification

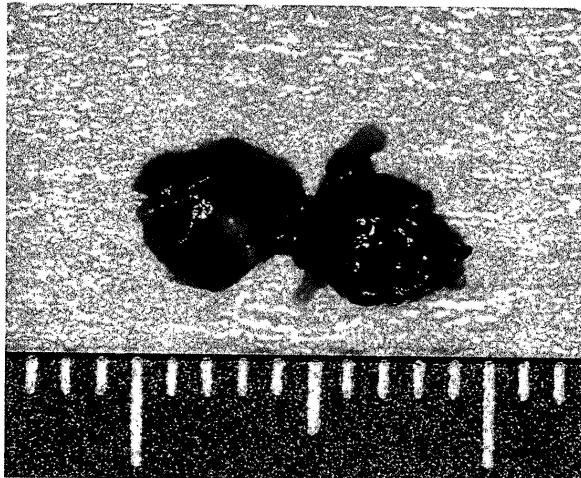


Fig 2. A small calculus found in the excision specimen

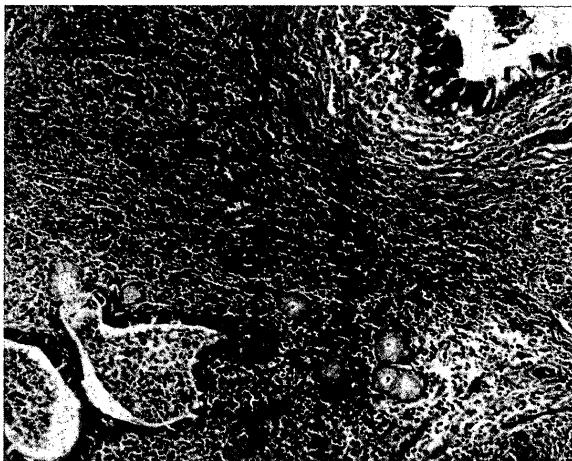


Fig 4. HE staining, high magnification

考 察

唾石症の発生率は顎下腺が80～92%，耳下腺が十数%～6%と、大唾液腺で95%以上を占め、舌下腺および小唾液腺では数%～2%と比較的希であると言われている¹⁾。

Jensen²⁾らは47症例、AnnerothとHansen³⁾は49症例、Yamaneら⁴⁾は76症例の各々の施設において加療された小唾液腺唾石症について検討し、本症は通常、孤立性の小さくて硬い可動性の粘膜下腫瘍として認められ、好発年齢は50～80歳代、好発部位は頬粘膜や上唇であると報告するとともに、その発生率はこれまで考えられたほど希なものではないのであろうと推察した。しかしながら我が国では、一施設において12年間で得られた7症例の小唾液腺唾石症について検討したものが最も多く症例を収集した報告であり⁵⁾、欧米での報告のように多数の小唾液腺唾石症例を収集し統計的に検討した報告は認められなかった。15年間に受診した251例

の唾石を統計的に検討した報告においても小唾液腺に発生した唾石は頬粘膜での1例のみであり⁶⁾、また、最近20年間に本学附属病院で採取された病理組織標本を検索しても本症例以外に小唾液腺唾石症は存在せず、本邦における小唾液腺唾石症の発生率は欧米のそれに比較して少ないものと思われた。しかし、その一方で、ただの炎症として処理され、見過ごされているケースもあるのかもしれない。

本邦における小唾液腺唾石症の報告例は、そのほとんどが3症例以下の少数例についての症例報告である。大山ら⁷⁾は自験例と1933年から1989年までの本邦における小唾液腺唾石症例報告、合計27症例について検討しており、本邦における小唾液腺唾石症の臨床的様相は欧米の報告と類似しており、発症年齢では高齢者が多く、性別では男性に多く、好発部位としては上唇と頬粘膜が多いことを示している。このような傾向はその後の症例報告^{5,6,8~11)}を加味してもほとんど変わらない。1933年から2002年までの70年間に自験例を含める

Table 1 Age and Sex of Minor Salivary Gland Sialolithiasis Reported in Japan (1933-2002)⁵⁻¹¹⁾

age \ sex	Male	Female	Total
0~9	0	1	1
10~19	0	1	1
20~29	0	2	2
30~39	2	3	5
40~49	5	3	8
50~59	3	4	7
60~69	9	2	11
70~79	13	3	16
80~89	3	2	5
90~	0	0	0
Total	35	21	56

Table 2. Site of Minor Salivary Gland Sialolithiasis Reported in Japan (1933-2002)⁵⁻¹¹⁾

Site	Upper Lip	Lower Lip	Cheek	Gingiva	Palate	Tongue	Total
Cases	28	8	16	1	2	1	56

と本邦では56例の小唾液腺唾石症が報告されている。発症年齢は70歳代に最も多く、次いで60歳代であり、60~70歳代をあわせるとほぼ半数を占める。男女比はおよそ3:2で男性が多く、男性では特に60~70歳代に発生が集中しているのに対して、女性では広い年齢層に分散している(Table 1)。好発部位は上唇が最も多く28例と半数を占め、次いで頬粘膜、下唇の順であり、口蓋や歯肉および前舌腺における発症は極めて希であるといえよう(Table 2)。本症の発生機序として導管内に粘調な唾液が停留し、2次的に石灰化が起こるが、その原因として、外傷や導管の形態といった局所的因子や唾液の生化学的性状が挙げられている²⁾。また、唾液の性状を変化させる全身的要因として長期にわたる副交感神経遮断薬の使用をあげている報告もある³⁾。主に慢性の導管損傷が原因とされる粘液嚢胞が下唇や舌尖に好発することを考えると、下唇腺や前舌腺では漿液性唾液の分泌能が上唇腺に勝るためではないかと考えられた。

本症例において摘出後の剖面で唾石の存在が確認されたが、術前のエックス線検査で腫瘍内に不透過物は認められず、石灰化が不十分な唾石であったのであろうと考えられた。過去の報告においてもエックス線検査で不透過物を認めない場合もしばしばあり、Jensenら²⁾は石灰化の程度により高度石灰化、部分的石灰化、非石灰化に分類し、部分的石灰化が23例と最も多く、非石灰化13例、高度石灰化11例であったと報告してい

る。

結語

69歳の女性の上唇に発生した小唾液腺唾石症を経験した。

本邦における小唾液腺唾石症の発生頻度は欧米に比較して稀なものと考えられた。

本邦において、小唾液腺唾石は70歳代の男性に多く、好発部位は上唇、頬粘膜、下唇の順であり、石灰化の程度が低くエックス線で検出できることも多いという特徴を持つことが判った。

参考文献

- 1) 宮崎正編：口腔外科、第1版、医歯薬出版、1988、p542~544.
- 2) Jensen JL, Howell FV, Rick GM, Correll RW.: Minor salivary gland calculi. A clinicopathologic study of forty-seven new cases. *Oral Surg. Oral Med. Oral Pathol.*, 1979 Jan; 47(1): 44~50.
- 3) Anneroth G, Hansen LS.: Minor salivary gland calculi. A clinical and histopathological study of 49 cases. *Int J. Oral Surg.*, 1983 Apr; 12(2): 80~9.
- 4) Yamane GM, Scharlock SE, Jain R, SunderRaj M, Chaudhry AP.: Intraoral minor salivary gland sialolithiasis. *J. Oral Med.*, 1984 Apr-Jun; 39(2): 85~90.
- 5) 小林吉史、寺崎伸一郎、村瀬 宏、他：小唾液腺唾石

- 症の臨床病理学的検討. 日本口腔外科学会雑誌(0021-5163), 36巻11号: Page2622~2627(1990.11).
- 6) 武田祥子, 川口哲司, 山城正司, 他: 唾石症に関する臨床的研究. 日本口腔外科学会雑誌(0021-5163), 40巻1号: Page155~160(1994.01).
- 7) 大山順子, 竹之下康治, 石井浩之, 他: 上唇小唾液腺に生じた唾石症の2例 文献的考察を加えて. 日本口腔外科学会雑誌(0021-5163), 37巻1号: Page161~167(1991.01).
- 8) 奥田 孝, 安岡 忠, 白木完治, 他: 小唾液腺唾石症の2例. 日本口腔外科学会雑誌(0021-5163), 38巻8号: Page1311~1312(1992.08).
- 9) 山村崇之, 安藤智博, 扇内洋介, 内山博人, 深田安紀子, 扇内秀樹: 下唇に生じた小唾液腺唾石症の1例. 日本口腔診断学会雑誌(0914-9694), 15巻1号: Page150~152, (2002.03).
- 10) 鈴木 圓, 宮田 勝, 岡部孝一, 高木純一郎, 坂下英明: 小児の頬粘膜に生じた小唾液腺唾石症の1例. 小児口腔外科, 12(1): 12~14(2002.06).
- 11) 相原悦二郎, 龍田恒康, 舟木章宏, 山田直子, 金井靖, 勅使河原靖史, 田草川徹, 高橋理恵子, 竹島 浩, 福永秀一, 田島 徹, 正田久直, 阪本栄一, 嶋田 淳, 山本美朗: 異なる小唾液腺に多発した唾石症の1例 その唾石の組成分析. 日本口腔診断学会雑誌, 15(2): 330~333(2002.10).